

分科会 2

ふしぎ発見！ ～科学の本と科学あそびを楽しもう～

子ども読書活動交流集会

講師：市川 美代子

(科学読物研究会)



子どもの成長を考えてみると、子どもは幼ければ幼いほど、まわりのことに興味を持っており、「生きていくこと」そのものがみんな興味の対象です。自然とのふれあい、人とのふれあい、社会とのかかわりの中で、言葉を獲得していくことがわかります。自分自身がたのしい、面白いと思うことが大切です。

人間の特徴は、物事を概念として抽象化してとらえることが出来ること。これは動物にはないものです。だからこそ、人間は次世代の子どもたちに文化として伝えることができるのです。映像で育てば、その力は弱まります。

科学とは人間がつくりあげたもので、自然の現象そのものではありません。科学という言葉には、ばらばらな知識ではなく、客観的に体系だてた知識という意味が込められています。

科学的に認識するという事は、事物や現象を体系的に認識することであり、そのこと

は同時に法則性を認識するという事でもあります。そのものの本質が書かれているかどうか重要です。その根底には科学的事実があり、それを踏まえたうえで、子どもたちにとって自然や科学に対する関心を抱かせるものであれば、物語（フィクション）でも科学読物としてとりあげたい。

身近なところにもこんな不思議な現象があると知って「面白い！たのしい！」「不思議だな、なぜだろう？」と思うこと。「なぜ？」と、問い続けることは楽しいことです。その時は解決しなくとも、そのアンテナを持ち続けていれば、大人になってから気づくこともあるかもしれない。本の中に答えが載っていないくとも「疑問を抱かせられる本」も大切です。仮説実験事業を提唱している板倉聖宣さんは、子どもの頃に不思議に思ったことがライフワークになったそうです。

◇科学読物の紹介（抜粋）

科学入門

『こっぷ』（福音館書店）表紙の写真から印象的。こっぷという概念、本質を子どもの視点、論理でとらえている。

『みず』（福音館書店）出版された頃は、水の本というとは表面張力や水の浮き沈みの本くらいしかなかった。子どもの感性を通しての水の本質が描かれている。

『わたしとあそんで』（福音館書店）作者のエッツは子ども時代に森で育った。主人公の女の子は野原（原っぱ）へ出かけて「あそびましょ」と話しかける。動物たちは最初は逃げてしまうが、女の子がじっと静かに自然と共にいると、戻ってきてくれる。物語絵本だが自然観察の入門となる本だと思う。

『たべたのはだれ？』（童心社）くるみの殻のあけ方が、食べた動物によって違う（実際に穴のあいたくるみを紹介）。

土壌生物

『しゃがんでみつけた にわさきのむし』（福音館書店）1980年刊だが今でも使える本。

遠目もきく。興味を持った子に読んであげるとよい。実物に近い大きさで虫をさわる手が描かれており、虫の実際の大きさもわかる。

『ミミズのふしぎ』(ポプラ社) ミミズの生態を描いていて面白い。『ミミズ博士と生きている土』(偕成社) は、更に興味を持った子に「こんな本もあるよ」と紹介できるとよい。

『ハサミムシのおやこ』(ポプラ社) 内容は衝撃的。ある種のハサミムシの生態をよく描いている。子どもの視線は地面に近く、地面の虫をよく見ている。

このほか『ぼく、だんごむし』『おちぼのしたをのぞいてみたら…』等、土壌生物の本は多く出版されている。

・写真絵本について

科学読物には写真絵本も多く出ており、実物よりも拡大されている場合がある。しかし全てが写っていることで、かえって見づらくなってしまっている場合もある。画家が実際に実物を見て描いた絵の方が、遠目がきいてよくわかる。

動物

『シートン動物記』(童心社) 今泉吉晴翻訳。<シートン動物記>は数多く翻訳されているが、比べ読みするとおすすめは今泉訳のもの。今までの訳者は文学者が多く、シートン動物記をシートンの創作としてとらえて翻訳してきた。今泉氏は動物学者。シートンの伝記(『シートン』(福音館書店))も書いており、「ほんとうにあった話」、動物の生態の記録として翻訳している。童心社版は物語の背景等の解説もあり、福音館書店版より翻訳も改訂され読みやすくなっている。私たち人間と動物は同じ仲間、人間も同じ動物と考えたのがシートンの動物記です。



生物・自然観察

『森のようちえん』(宝島社) デンマークの幼稚園は校舎が無く、毎日晴れの日も雨の日も森へ通って、自然の中で1年を過ごして想像力を育む子どもたちが描かれている。大人向けに解説された『さあ、森のようちえんへ』も出版されている。

『あきのほし』(偕成社) 子どもと一緒に空を眺めたり、例えば十五夜などの行事や月や星にまつわる物語や歌を子どもたちに語り、歌ってあげてほしい。小さい頃に聞く読み聞かせやわらべうたは、テレビと違って想像する心を育みます。自然と一体となって親子で共感して楽しむ時間を持ってほしい。

レイチェル・カーソンは、著書『センス・オブ・ワンダー』(新潮社)の中で、「子どもたちの世界はいつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれているが、残念なことに、多くは大人になる前に失ってしまう」と述べています。「子どもの感動を大人と一緒に共感することで、大人にもみずみずしい感性が戻ってくる」「人間以上の存在に思いをはせる人は、どんなに苦しいことがあっても生きる力になって絶望することはない」とも言っています。

『ひがんばん』等、甲斐信枝さんの絵本は、どれも対象物への興味と感動と愛情を持って描かれています。絵だけでなく言葉も重要。著書『小さな生きものたちの不思議なくらし』(福音館書店)には、「体中が感性そのものの

ような幼児期には自身の目と心で自然を覗いてほしい」「自然はとても柔軟。その扉を押しさえすれば、押す人の心に照らして千変万化のおつきあいをしてくれる。裏切ることはない」と書かれています。また「子どもの心を豊かにするためには、物語の世界も科学の世界も両方欠かせない」とも。

『科学の本っておもしろい 2003-2009』（連合出版）科学読物研究会編集による科学読物のガイドブック。これまでの本とどうちがうのか、できるだけ子どもたちの反応にふれながら紹介しています。

子ども時代に大切なことは、自然の不思議さに驚く心と感性を育む体験。現実の世界とファンタジーの世界を行き来する体験が大切です。空を眺めたり、自然を感じ一体となる時間を持ってほしい。子どもたちがひとりである時間を楽しんでほしい。あるいはぼんやりしながら何もしない時間を持ってほしい。忙しすぎると自然を感じられなくなるものです。

◇科学あそび「コマをつくろう」「コマであそぼう」

厚紙を切って好きな形のコマを作成した。重心を調べて軸の位置を決めることにより、どんな形のコマでもよく回すことができた。参考：『独楽』（文溪堂）、『こままわるかな』（福音館書店）、『まわれぶんぶんごま』（岩波書店 p.25 に重心のとりかた掲載）

◇配布資料

「子どもの科学読物」「コマをつくろう コマであそぼう」ブックリスト

分科会 3

わらべうたであそぼう

～耳からはじまる児童文学～

子ども読書活動交流集会（実技編）

講師：坂本由紀子

（児童図書館研究会会員 元公共図書館司書）

○はじめに

近年わらべうたは、ブックスタートや子育て支援の広まりにより興味関心が高まっている。皆さんの中にもわらべうたや絵本の読み聞かせ等、実際に活動をしている方がいると思う。しかし、まだ多くの大人がわらべうたに親しんでいるわけではない。

そこで本講座は、わらべうたの実技を通して「わらべうたであそぶ」体験をしてもらい、わらべうたに親しむ一歩としたい。

○わらべうたとは

わらべうたは、子どもたちが自ら歌って楽しむうた。または、大人に歌ってもらいながら口づてで伝承してきたうたである。

そこには、美しいことばやふれあい、ゆったりとした安心のリズムが満ちている。

赤ちゃんは、人の声が好き。そして、ゆったりしたリズムやふれあいを好む。わらべうたは、この赤ちゃんの特性にあっていて、ぜひ絵本に入る前にわらべうたを手わたしてあげたいと思う。

それは、肉声で大人と一緒に楽しみながら、遊びながら覚えたものとして、体に深く入り記憶に残るだろう。このことから、児童文学は耳からはじまるといえるのである。

○実践

ここでは、わらべうたの基本である口づたえの伝承形式を大切に考え資料等は配らずに、うたを紹介しながら体験（3回ずつ）を繰り返し行う。

子どもや親の気持ちになって、楽しみながら「わらべうたであそぶ」体験をしましょう。

想定：図書館のわらべうた講座に初めて参加する緊張した親子づれ
対象：赤ちゃんから乳幼児の未就園児

① 緊張を解きながら

このときの心構えは、決して無理強いをしないということ。

子ども自ら遊びに入ってくる 때가必ずあるため、参加は子どもに任せ静かなふれあいからはじめる。

お友達紹介、ねんねしたくまさん登場

♪ととけっこー

呼びかけ くまさん はあい
みなさん はあい

♪ぼうず ぼうず

♪このここのこ かつちんこ

♪うまはとしとし ないてもつよい

② 布の感触

布を使って、やわらかくふれあう。
布の手触りや動きに驚きと感動がある。

布を配りながら…

♪だれにあげよか えんやらもものき

呼びかけ ○○ちゃんにあげよか
○○くん にあげよか

♪じーじーばあ じーじーばあ

♪にぎりぱっちり たてよこひよこ

♪うえからしたからおおかぜこい

布を回収しながら…

♪もどろうもどろう もものはもどろう



③ 動き、みんなで遊ぶ

親子・他者との体のふれあい、高揚感を味わう。

♪おちゃをのみにきてください

橋のトンネルをくぐりながら…

♪どんどんぼしわたれ さあわたれ

♪もどろうもどろう もものはもどろう

④ ゆっくり落ちついて向きあう

席に戻り親子が向いあつてのふれあい。
手あそび・指あそび。

♪もちっこやいて

とっくらきやしてやいて

しょーゆーつけて

たべたら うまかろう

おもちを食べながらほっこりした気分

♪ここはとうちゃんにんどころ



呼びかけながらほっぺやひたいをつ
ついたり、なでたりする顔あそび。

♪おやゆびねむれ さあねむれ

指を閉じたり広げたりしながら、手の
感触を楽しむ指あそび。

♪とうきょうとにほんばし

⑤ 静かに終わる

深呼吸をするような落ちつきの時間を
素朴な肉声だけで味わう。

♪さよならあんころもち またきなこ

— おしまい —

○復習

ここでは、子どもたちにわらべうたを手わたす大人としてきちっと勉強しインプットしてもらいたいと考え、楽譜を見ながらの復習を行う。

また、この他にも響きや繰り返しのリズム、季節を楽しむわらべうたを以下の通り紹介。

♪めんめんすーすー

♪いちりにりさんり しりしりしり

♪おふねがぎっちらこ

♪あしあしあひる かかとをねらえ

♪おせよおせよ さむいでおせよ

♪こどもかぜのこ じじばばひのこ

♪かれっこやいて

♪せんべせんべやけた

♪ぎっちょうぎっちょう こめつけこめつけ

♪ももやながれがはやい

♪ずくぼんじょ

♪たんぼぼ

わらべうたは、耳から伝えられるもの。子どもたちは、ふれあいを通じたくり返しやとりの中から美しいことばやその響きを受けとめ、自由に想像をふくらませて楽しむ力をもっている。大人の役割は、その楽しさを共有し、動きを助ける道筋を示すことである。

○わらべうたの手わたし方

- ・自然体で、自発的に（無理やりでなく）
- ・肉声で

- ・心もち高めの声で
- ・ゆっくり、くり返しくり返す
- ・子どもと直接ふれあい、心地よさを一緒に楽しむ

わらべうたの会は継続性があるとよい。その場合は、最低半分は前回と同じ曲の構成で行い、徐々に新しい曲を増やしていくことが望ましい。そうしてくり返し親しんだものが、安心のリズムへとつながっていく。

○おわりに

子どもたちには、大人やお友達との関わりを「どうぞいらっしやい (welcome)」と受け入れることのできる感情を培ってもらいたい。また、分けへだてのない地道なつきあいや、自分は受け入れられていると実感できる体験を持ってほしいと思う。

わらべうたは、それらの出発点にある「ことばうた」であり、安心感や居場所獲得を助けるものである。

どうぞ皆さん、子どもたちと一緒に自身も楽しみ絵本を読んであげてください。児童文学のはじめの一步を手わたしてください。

【参考図書】

『幼い子の文学』瀬田貞二著 中央公論社

『石井桃子集7』石井桃子著 岩波書店

『いっしょにあそぼうわらべうた』

コダーイ芸術教育研究所著 明治図書出版

『あかちゃんとお母さんのあそびうたえほん』

小林衛己子編 のら書店

『子どもとお母さんのあそびうたえほん』

小林衛己子編 のら書店

『にほんのわらべうた 1～4』

近藤信子著 柳生弦一郎著 福音館書店

『子どもの心に灯をともしわらべうた』

落合美知子著 エイデル研究所